

報告

実際に採血を行う技術チェックの看護技術教育上の意義

嘉手苺 英子<sup>1)</sup> 金城 忍<sup>1)</sup> 名城 一枝<sup>1)</sup> 安里 葉子<sup>1)</sup>

看護技術教育において学生同士が看護者 患者役の体験を通して技術を修得する方法が広く行なわれている。採血技術は痛みを伴うことから、学生同士で実際に採血をする体験では日常生活に密着した看護技術とは異なる学習経験をする。本研究の目的は、採血技術の学習において実際に採血を行う技術チェック(本番チェック)に、看護技術教育上どのような意義があるのかを明らかにすることである。対象は、A 公立看護大学2年生80名である。採血技術学習の最終段階で、実際に採血をする技術チェックを1人ずつ行ない、終了後に、「本番チェックがあった方がよいかどうかとその理由」および「体験してみて感じたこと、わかったこと、困ったことなど」について自由記載のアンケートを求め、提出は学生の自由意思に委ねた。その記述内容を「体験からどのようなことを学んだのか」という観点から読み意味内容を抽出した。それらを学びの性質で類別し、採血技術の本番チェックがもたらす看護技術教育上の意義をとり出した。アンケート調査紙は80名中73名の学生が提出し、全員が採血技術の学習で本番チェックがあった方がよいと答え、その理由として血管モデルの限界や初回実施時の条件を上げていた。自由記述の意味内容を抽出し、実際に採血を行う技術チェックがもたらす看護技術教育上の意義について以下の4項目をとり出した。『1. 実際の感覚を伴う体験を通して、技術のポイントやその根拠を得心する』、『2. 対象の個別な状態や予想外の反応に遭遇した体験から、看護技術が対象に合わせて使われることを知る』、『3. 患者体験を通して看護者の心理状態や言動が患者に影響を及ぼすことを実感し、技術を実施する時のありがたい看護者像を描く』、『4. 他者に痛みを与える怖さや失敗ができないプレッシャーに直面し、それを乗り越えることで看護者としての自信や責任感を得る』。

Key words : 採血 実体験 技術チェック 看護技術教育

I はじめに

2004年、日本看護協会が全国の病床数200床以上の病院を対象に行った新卒看護職員の早期離職等実態調査<sup>1)</sup>の結果によると、入職後1年以内の離職率は全体平均で8.5%であった。早期離職の原因として看護部の回答では「看護基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップが大きい」が約80%と最も多く、新卒看護職員自身の回答でも仕事上の悩みとして最も多かったのは「配置部署の専門的な知識・技術の不足」であった。2002年には、同じく日本看護協会によって新卒看護師の看護基本技術に関する実態調査<sup>2)</sup>が行われている。それによると、入職後3か月の時点で新卒看護師本人が「現在一人でできる」と回答した技術項目は限られている一方で、看護師の半数以上が卒後2か月までに夜勤に入っていた。ある総合病院に勤務する卒後2か月目の新卒看護師98名を対象に吉富ら<sup>3)</sup>が行った調査では、困難だと感じる看護技術の第1位は採血で、その後、点滴、吸引、導尿などの医療処置に関する技術が続いていた。これらから新卒看護師は、看護技術の中でも対象の安全を脅かす恐れのある技術の実施に困難を感じていることがわかる。

看護基礎教育についてみると、臨床実習で看護学生が直接体験の機会を得るのが困難になってきているという現実がある。その背景として、「医療の高度化・患

者の高齢化・重症化、平均在院日数の短縮等により、看護業務が多様化・複雑化して密度が高くなってきている。また、患者の人権への配慮や、医療安全確保の取り組みが強化<sup>4)</sup>」されてきていることがある。臨床実習での看護技術の体験について、基礎看護技術の体験率が減少しており、その中で日常生活に関する看護技術に比べて医療処置に関する技術項目の体験が少ないとの宇佐見らの報告<sup>5)</sup>や、日常生活に関する看護技術に比べて医療処置に関する技術項目では単独で実施した学生は少なかったとの末永らの報告<sup>6)</sup>がある。そして、学生が単独で実施した技術では技術修得の自己評価が高かったことから、技術修得に向けて実習環境の整備や学内実習の充実、臨床実習との効果的な連携が必要であると指摘している。

看護基礎教育における技術教育の目標は、実践現場で対象の個別な状況に合わせて適用できる基本技術の修得である。我々は、「看護技術を看護観の表現と位置づけ、看護技術の立体像を形成し、その像に導かれながら看護者と患者の立場を変換しつつ技術を身につける」という看護技術教育上の仮説<sup>7)</sup>に基づいて技術教育を行っている。看護技術の修得過程<sup>8)</sup>には、当該技術の立体像(その技術の行動のポイントと根拠と目的とを関連づけたイメージ)を描く「知る段階」と、描いた立体像に導かれながら繰り返して体に定着させる「身につける段階」、そして対象の条件を見抜きそれに合わせて看護技術を適用する「使う段階」があり、それぞれに合わせた教育方

1) 沖縄県立看護大学 基礎看護

法上の工夫が必要である。学内での‘身につける段階’と臨床現場での‘使う段階’とでは質的な差異が大きく、臨床実習で看護技術を使う時の学生の戸惑いは大きい。そこで、我々はその差を縮める方法として、いくつかの看護技術について設定状況下で看護者として自分で判断し行動するという技術の個別チェックを学内で行っている<sup>9)</sup>。今回取り上げた採血技術はその一つである<sup>10)</sup>。

採血技術は医師の指示への正しい理解と、他者に痛みを与えるというストレスを乗り越えて相手の立場に立って実施することが求められる看護技術である。採血技術の学習では、血管モデルを用いた練習の後に学生同士で実際に採血を行わせている<sup>11)</sup>。我々はこれまでの教育体験の中で、実際に採血を行う技術チェックが採血技術の修得にとどまらず看護技術とは何かの理解を深め、看護者としての成長を促す機会になっていることを実感してきている。このような技術チェックにおける学生の学びを浮き彫りにし、技術教育上の意義を明らかにすることは、看護技術の修得を促す教育方法の発展につながると思われる。

本研究の目的は、採血技術の学習において実際に採血を行う技術チェックで学生がどのような学びをしたのかを学生の記述から抽出し、実際に採血を行う技術チェックに看護技術教育上どのような意義があるのかについて明らかにすることである。

## II 研究方法

### 1. 研究対象

対象は A 看護大学 2 年生 80 名である。

### 2. 研究方法

1) 採血技術学習で採血用血管モデルでの練習の後、学生同士で患者 看護者役になり実際に採血を行う技術チェックを、4 名の教師が分担してひとりずつ行う。

2) チェック終了後、‘本番チェック（実際に採血を行う技術チェック）があった方がよいかどうかとその理由’および‘体験してみて感じたこと、わかったこと、困ったことなど’について自由記載のアンケート調査を行う。

3) アンケートの記述内容を‘体験からどのようなことを学んだのか’という観点から読み、内容毎にカードに書き分けこれを研究素材とする。各素材について記述内容の意味を読み取る。書き分けや意味の読み取りに際しては、必要に応じて教師の技術チェック記録や授業記録を参考にして、学生のチェック状況を具体的に想起し、個々の学生の体験をできるだけ観念的に追体験するよう努める。

4) 全素材から取り出した意味内容を帰納的に類別して学びの性質をとり出し、実際に採血を行う技術チェックがもたらす看護技術教育上の意義について明らかにする。

3) および 4) を筆頭研究者が行った後、その結果に事実に論理的な矛盾がないかを共同研究者と検討する。

尚、筆頭研究者および共同研究者は共に看護技術教育の経験がある。

### 3. 用語の定義

実際に採血を行う技術チェックとは、教員の指導・監視の下で、学生同士で看護者役および患者役になりながら実際に採血を行わせる技術チェックのことである。実施に際して教員は、検査指示の確認から物品の準備、採血までのひと流れを学生が自分で判断し行動するよう、指示をせずに見守る。同時に、採血の目的が安全に達成できるよう、必要な場合は即座に助言、介助、または交代して患者役および看護者の安全を守る。

### 4. 倫理的配慮

アンケート調査に関しては学生に研究目的および授業科目の成績とは関係がないことを説明し、各自の意思により提出してもらった。論文作成に際しては個人名を伏せ、記述例の提示は典型例を用いて個人が特定できないよう配慮した。

## III 研究結果

1. アンケート調査紙は 80 名中 73 名 (91%) が提出した。

2. ‘本番チェックがあった方がよいかどうか’について

採血技術の学習で‘本番チェックがあった方がよいかどうか’については全員があった方がよいと答えた。その理由（複数回答）として、73 名中 43 名 (59%) が‘血管モデルと人間の皮膚や血管の感触との違い’のように、モデルの限界を上げていた。次いで、‘初めての採血が患者では不安’‘教師の指導の下で実施できる’のように、初めて採血を実施する時の条件を上げた者が 14 名 (19%) であった。その他に、‘取り組む時の意識がモデルとは違う’が 10 名 (14%)、‘体験しなければ分からないことがある’が 9 名 (12%) があった。

3. ‘体験してみて感じたこと、わかったこと、困ったことなど’について

‘体験してみて感じたこと、わかったこと、困ったことなど’に自由記載された文章を読み、記述内容のまとめり毎に原文をカードに書き分け、全記録から計 227 の素材を得た。次いで、それぞれの素材の記述を‘どのようなことを学んだのか’という観点から読み、その意味内容を抽出して記述した。全ての素材から抽出した意味内容を比較検討しながら実際に採血を行う技術チェックから学んだことを類別した。その結果を図 1・表 1 に示す。

読み取れた学びの意味内容がどのような体験に基づいているのかを見てみたところ、大きく看護者体験、患者体験、そして採血技術の学習全体があった。以下、それぞれについて述べる。尚、文中の「」は記述内容、

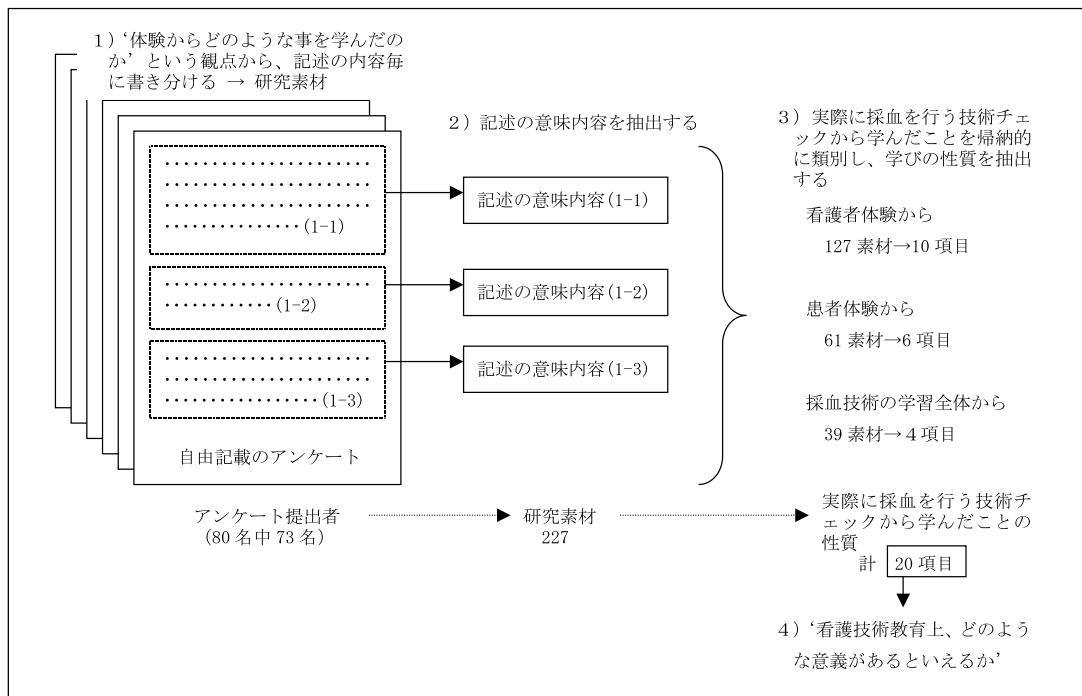


図1 研究素材の作成から結果をとり出すまでのプロセス

「」内の文末の数字は素材番号を示している。《》は、「」の記述内容から抽出した実際に採血を行う技術チェックから学んだことを示している。《》内の文頭の数字は表1の数字と同じである。

1) 看護者体験に依拠した学び

まず、看護者体験にもとづいた学びについて述べる。

「実際に、人の体に針を刺すということにとっても責任を感じた。準備の段階でも‘本当にこれでOKなのか’と自分の中で何度も確認をした。…針を刺入する時もあまりにも迷っていると患者に不安を与えるし、駆血帯を巻いているために待たせてはいけないと思い…自信をもって刺した。(38-3)」という記述は、看護者体験をしている時の気持ちと行動を述べたものである。この記述から、

実際に刺すことに責任を感じ、何度も自問自答を繰り返したが、迷いが対象に不安を与えることから自信をもって実施したと、意味内容を取り出した。このように実際に人の体に針を刺すことに対する恐怖やプレッシャーを感じそれを乗り越えたという内容の素材が16あり、それらをまとめて《恐怖やプレッシャーを乗り越え、自信や責任感が持てた》とした。これと、モデルを使った練習と比べて緊張感や気持ちの違いを記述していた11の素材からとり出した《モデルとは緊張感や気持ちが違う》とまとめて、《気持ちの上で強いストレスを体験した》とした。

次に、「モデルでは血管に入る時、‘ぶちっ’という感覚があって血管内に入ったことを実感できるけど、生身の身体に刺すと、そういう感覚が全く伝わらなくて驚いた。触診するとき走行や深さ、太さをしっかりと頭に描いて本番に移るといふ大切さを実感した(48)」という

記述からは、その意味として 実際では刺入の感覚がなかったことから、刺入前に血管の状態を確実に描いておくことの大切さを実感したと抽出した。これは触診によって血管を確認し、描いたイメージに沿って針を刺入するという刺入時のポイントが、実際に体験することによって明確になったことを示している。この素材の他に、実際にやってみて血管の刺入部のやや手前の皮膚に針を刺入する根拠を納得したことや、採血の一連の行動が無菌操作など様々な原理に基づいて行われている事が分かったなどがあり、これらは採血技術の立体像形成を促進するものだと言える。そこで、類似の23の素材を含めて、《実施して採血技術の立体像がより確かになった》とまとめた。さらに、「困ったことは私が採血する時に、消毒を終えて針を刺そうというときになって、相手が緊張して、血管が全く見えなくなったことです。このようなことは全く予測していなかったので、とてもとまどってしまいました。相手は人間なので、モデルでは起こらないことも起こったりするのだということを実感しました(46-2)」の記述からは、その意味を、刺入直前に緊張で患者の血管の怒張が消えた事にとまどい、対象が人間であることを実感したと取り出した。この素材の他に、針のキャップを外す時に針も一緒に抜けてしまい慌ててしまったなど、類似の16の素材を含めて《予想外の出来事や患者の反応に遭遇した》とまとめた。看護者体験にもとづいたものとしては他に7項目あり、計10項目であった。

2) 患者体験に依拠した学び

次に、患者体験にもとづいた学びとして、「…実際に

表1 実際に採血を行う技術チェックからの学びと、看護技術教育上の意義

依拠した体験	採血技術の本番チェックからの学び	看護技術教育上の意義
看護師体験から (127)	① 気持ちの上で強いストレスを体験した(27) ② モデルと人の皮膚や血管との感触が違っていた(26) ③ 実施して採血技術の立体像がより確かになった(24) ④ 予想外の出来事や反応に遭遇した(16) ⑤ 人によって血管の状態が違うのでよく観察しそれに合わせて行う(7) ⑥ 看護師の言動で患者に苦痛を与えてはいないかと気になった(7) ⑦ 教師の存在に安心した、助けられた(5) ⑧ 自分や他学生の行動から技術のレベルを評価した(4) ⑨ 他学生の行動からイメージを広げたり、患者体験に生かしたりした(3) ⑩ 実習後も残っている疑問や困ったこと(8)	② ③ ⑧ ⑨ ⑫ ⑬から 『実際の感覚を伴う体験を通して、技術のポイントやその根拠を得心する』  ④ ⑤から 『対象の個別な状態や予想外の反応に遭遇した体験から、看護技術が対象に合わせて使われることを知る』  ⑥ ⑪ ⑭ ⑮ ⑯から 『患者体験を通して看護師の心理状態や言動が患者に影響を及ぼすことを実感し、技術を実施する時のありたい看護師像を描く』
患者体験から (61)	⑪ 看護師の言動に患者の気持ちが影響を受ける(25) ⑫ 患者の立場から感じた採血(11) ⑬ 技術のポイントの意味が患者の立場から納得できた(9) ⑭ 患者の立場から感じた看護師への思い(8) ⑮ 患者体験の重要性や必要性を感じた(5) ⑯ 患者体験で学んだ事を看護師体験に生かした(3)	① ⑦ ⑰ ⑱から 『他者に痛みを与える怖さや失敗ができないプレッシャーに直面し、それを乗り越えることで看護師としての自信や責任感を得る』
採血技術の学習全体から (39)	⑰ 学生のうちにやってよかった(11) ⑱ 実際にやることから他の看護技術とは取り組み方が違った(7) ⑲ 学習方法についての要望など(11) ⑳ その他(10)	

( ) の数字は素材の数を示す  
n = 227

取られるということで緊張していましたが、看護師が落ちついていたり、技術が安定していたので、安心して見ていられました。患者をやってみて、看護師の行動・技術、表情1つ1つが患者さんに不安や安心を与えるということを、身をもって知ることができました(25-1)から、看護師の態度と技術で安心したこと、看護師の言動で患者の気持ちが不安にも安心にもなることがわかったと抽出した。内容が似ていた25の素材を含めて、『看護師の言動に患者の気持ちが影響を受けることがわかった』とまとめた。さらに、「止血をするアル

コール綿は注射針を刺す前に絞ってたたんで、きちんと準備をして刺さないと、針を刺している途中で準備をした時に、すごく不安になりました。看護師役だけでなく、患者側の立場になってみると、順番等を考えさせられました(32-8)からは、看護師の後手の行動によって患者として不安を感じたことから、段取りの必要性を感じた」ととり出した。さらに、類似の9つの素材を含めて『技術のポイントの意味が患者の立場から納得できた』とまとめた。患者体験にもとづいたものとしては他に4項目あり、計6項目であった。

### 3) 採血技術の学習全体に依拠した学び

採血技術の学習全体にもとづいたものとしては、「実際に看護者役をしてみ、練習や仕上がりチェックではうまくいっていたのに、本番では手の震えがとまらなくてそんな自分に驚いて、よけいに緊張してしまったように思う。でもこれが学内で本当に良かったと思った。(8-2)」の記述から、実際に採血した時、練習やモデルでは起こらなかった予想外の過度の緊張を体験し、学内でよかったと思ったと抽出した。現場での採血では学生の甘えは通じないなど似た内容の11の素材から《学生のうちにやってよかった》とまとめた。採血技術の学習全体に依拠した学びとしてはその他に3項目あり、計4項目であった。

## 4. 実際に採血を行う技術チェックがもたらす看護技術教育上の意義

以上の計20項目について、「看護技術教育上、どのような意義があるといえるか」と問いかけながら比較検討した。

まず、《モデルと人の皮膚や血管の感触が違った》や《実施して採血技術の立体像がより確かになった》から、技術のポイントとなる行動の明確なイメージやその根拠を、実体験を通してつかんでいたことが上げられる。そしてこの体験は実施者としての看護者体験だけでなく、《技術のポイントの意味が患者の立場から納得できた》や《 》、《 》、《 》のように、患者体験や他学生の行動の観察によっても生じていた。ここから、実際に採血を行う技術チェックがもたらす看護技術教育上の意義として、『実際の感覚を伴う体験を通して、技術のポイントやその根拠を得心する』を導き出した。

次に、《人によって血管の状態が違うのでよく観察し、それに合わせて行う》や《予想外の出来事や患者の反応に遭遇した》から、自分があらかじめ描いたイメージのままに行動するのではなく、目の前の対象をよく見ることとその状態に合わせて自分の行動をつくり出さなければいけないとの気づきが上げられる。ここから、看護技術教育上の意義の二つ目として、『対象の個別な状態や予想外の反応に遭遇した体験から、看護技術が対象に合わせて使われることを知る』を導き出した。

《看護者の言動に患者の気持ちが影響を受けることがわかった》や《 》、《 》、《 》は看護者の言動に対する患者の気持ちに関する気づきである。これは患者体験と共に看護者体験をしている時の患者役の反応からも気づいていた。そして、患者体験を次の看護者体験に生かすだけでなく、技を磨いて自信をもって臨むなど看護者としての目標像を描いていた。これらから三つ目として、『患者体験を通して看護者の心理状態や言動が患者に影響を及ぼすことを実感し、技術を実施する時のありたい看護者像を描く』を導き出した。

《気持ちの上で強いストレスを体験した》から、実際に人間に針を刺すことから生じる強い不安や緊張があったことがわかる。そして、《実際に行うということから他の看護技術とは学習の仕方が違った》や《 》、《 》は、行動を後押ししたものとして練習を重ねたことへの自信や教師の存在などがあったことを示しており、学生は行動できたことに対して達成感や自信を得ていた。学生の不安の中には、自分がやってもいいのだろうかという問いのように、他者の生命に直接関与する責任に対峙するものもあった。これらから四つ目として、『他者に痛みを与える怖さや失敗ができないプレッシャーに直面し、それを乗り越えることで看護者としての自信や責任感を得る』を導き出した。

## IV 考察

実際に採血を行う技術チェックに対する学生の記述から導き出した看護技術教育上の意義について、以下、看護基本技術の修得という観点から考察する。

個々の看護技術には安全で安楽にその技術の直接目的を達成するための行動のポイントがある。看護技術修得の‘知る段階’ではこのような行動のポイントと根拠と目的とを関連付けた立体像として描き、‘身につける段階’では描いた立体像に導かれながら実際に自分の体を動かして体に技術を定着させる。立体像の描き方があいまいな場合は、この段階で行動を通して間違った立体像が修正されたり明確になったりする。看護技術教育上の意義としてとり出した『実際の感覚を伴う体験を通して、技術のポイントや意味を得心する』は、このような‘身につける段階’における立体像形成を示している。学生は技術チェックに至るまでに血管モデルを用いて立体像に導かれた練習を繰り返しているが、実体験を通して得た実際の感覚に裏付けられて、さらに理解が深まっているといえる。これらは一般的な認識から感覚的なものへと近づく認識の動き<sup>12)</sup>であり、採血に関する認識の発展を示している。山岸<sup>13)</sup>は、看護基本技術の学内演習における約10か月間の教授-学習過程を分析して、学生が患者・看護者の体験から生じた感情を契機に看護技術の立体像が広がっている事を明らかにし、実際の感覚を伴う体験が技術修得上重要であることを示唆している。

看護者はあらかじめ描いていた看護技術の像に導かれながら行動するのであるが、行動に際しては対象の状況の観察から出発しなければならない。二つ目の‘対象の個別な状態や予想外の反応に遭遇した体験から、看護技術が対象に合わせて使われることを知る’は、看護技術のこのような特徴を示している。採血では対象の血管の状態を具体的に把握しなければ失敗につながるため、学生は実際の採血を通して対象を観察する重要性を身をもって知ることになる。さらに学生は、‘学んだ方法をそのまま目の前の対象に適用しようとする自分に気づく’という、技術修得上重要な節目となる体験ができる。初心者の場合、

対象の状況に合わせて基本形から応用の形を作り出すことは経験者が想像する以上に困難なことが多い。技術の適用が基本技術をそのままあてはめるのではないとの気づきをいろいろな場面で繰り返しながら、看護技術が対象の事実から出発し対象に即して使われるとの確かな認識に至るのではないかと感じている。実際に採血を行う技術チェックは、このような気づきの機会を提供している。

三つ目の『患者体験を通して看護者の心理状態や言動が患者に影響を及ぼすことを実感し、技術を実施する時のありたい看護者像を描く』は、看護技術が患者と看護者の相互作用の上に成り立っていることの理解を示している。看護技術の学習では、学生同士で看護者と患者の役割を交代しながら体験することが多い。患者体験を先にした場合には、患者として気づいたことを次の看護者体験に生かすことができる。逆に、看護者体験が先の場合には、その後の患者体験を通して看護者役をしていた時の言動を振り返り、その時の患者役の思いを想像して看護者としての自分の言動が評価できる。このように、看護者役と患者役双方の体験が学生の中で影響し合って直接的体験以上の気づきをもたらしている。これは、三浦<sup>14)</sup>が認識の働きとして述べている、想像力を働かせて観念的に体験したことが「現実の自分にひきつがれ、現実の自分を成長させること」にはかならない。このような認識の発展は練習の中でも見られる<sup>15)</sup>が、設定された状況下で行う技術チェックではより実際に近い体験となることから、体験から受けるインパクトが大きいと考えられる。

四つ目の『他者に痛みを与える怖さや失敗ができないプレッシャーに直面し、それを乗り越えることで看護者としての自信や責任感を得る』は、実際に採血を行う技術チェックが看護者としての成長につながる可能性があることを示唆している。実施することへの責任や畏れを抱えていることから生じるストレスは、自然で健康的な反応だといえる。このストレスを乗り越えるためには、技術面での自信の他に行動する勇気が必要である。このようなストレスに対峙して乗り越える体験は、技術の修得にとどまらず他者の生命や生活に直接関わる看護者としての成長につながると考える。ストレスの感じ方には個人差があることから、採血に伴う学生の感情を受け止めながら個別な対応が必要である<sup>16)</sup>。また、実際に採血を行う技術チェックで、教師には看護者役のその時々行動から判断過程を読み取りつつ、このまま行動を見守るか介入すべきかを判断し行動する能力が問われてくる。これらは、学生が安心して自らの判断で行動できるために不可欠な条件だと思う。

## V まとめ

看護技術を使うということは他者に対して何かを行うことである。看護者として他者に何かを行う時に責任感

や畏れを感じることは、看護者として成長する上できわめて重要である。看護技術を‘身につける段階’でこのような体験を重ねることは、臨床実習でのストレスを緩和し、‘使う段階’への移行を助けるものと思われる。

本研究では学びの特徴をクラス全体として把握し、学びの積極面に焦点を当てて分析した。看護技術の修得は個別であることから、今後、学生の個別な特徴とそれに対応した指導のあり方について明らかにしていく必要がある。

今回の研究成果は、これまで基礎看護学の「看護方法」の授業を受講した学生との教授-学習過程の積み重ねに支えられている。今回、アンケート調査にご協力いただいた学生と共に、看護技術の修得に真摯に取り組みさまざまな段階で看護者としての成長を見せてくれた学生たちに感謝します。

## 文 献

- 1) 「新卒看護職員の早期離職等実態調査」日本看護協会、2004
- 2) 新卒看護師の『看護基本技術』に関する実態調査、日本看護協会、2003
- 3) 吉富美佐江、横田栄子、石井美幸、白井陽子、長島文子、飯泉良枝、篠塚恵美子、加藤妙子：新人ナースの採血技術に関する修得の実態 卒後2か月目の自己評価からの分析、成田赤十字病院誌、4巻、p 41-44、2002
- 4) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書、厚生労働省、2003
- 5) 宇佐見千鶴代、小黒由美子、佐藤めぐみ、安藤夢子、江本民子、下里志寿子、須賀京子、永美佐子、花市節子：臨床実習における基礎看護技術経験率の推移、看護教育の研究、17号、p 144-145、2000
- 6) 末永由理、今泉郷子、清水佐智子、藤村真希子、山下由香、廣瀬信子、屋宜譜美子：臨地実習における看護基本技術の体験及び修得状況、川崎市立看護大紀要、10(1)：11-18、2005
- 7) 薄井坦子、嘉手苅英子、中澤容子、小野寺利江、新田なつ子、山岸仁美、木内陽子：看護技術の得過程の効率化に関する研究、昭和60、61年文部省科研費(一般B) 成果報告書、1987
- 8) 薄井坦子編：Module方式による看護方法実習書<改訂版>、現代社、1990
- 9) 嘉手苅英子、山本利江、和住淑子、山岸仁美、新田なつ子、寺島久美：モジュール学習による看護技術教育の展開(1) <自己学習-グループ学習-個別指導-自己評価>システムによるモジュール学習の展開-従来の看護技術教育の限界を乗り越えるための取り組み-、総合看護、33(2)：21-32、1998
- 10) 嘉手苅英子、棚原節子、仲宗根洋子、名城一枝、大田貞子、金城忍：看護技術の立体像に導かれた採血

- 技術の修得を促す教育方法、沖看大紀要、第2号：67-75、2001
- 11) 金城忍、仲宗根洋子、名城一枝、大田貞子、棚原節子、嘉手苺英子：採血技術の修得を促す血管モデルの条件 - 採血用血管モデルの作成過程の分析から -、沖看大紀要、第2号：82-99、2001
- 12) 庄司和晃：仮説実験授業と認識の理論 - 三段階連関理論の創造 -、p156-166、季節社、1981
- 13) 山岸仁美：看護基本技術の修得過程における学生の認識の発展過程の構造、千葉看会誌、6(1)：23-29、2000
- 14) 三浦つとむ：こころとことば、p49、季節社、1991
- 15) 山岸仁美、山本利江、嘉手苺英子、新田なつ子、寺島久美：モジュール学習による看護技術教育の展開(3)、学内実習記録から技術の修得過程を把握する取り組み、総合看護、33(4)：49-58、1998
- 16) 山本利江、和住淑子、青木好美、尾高みち子、山岸仁美、嘉手苺英子：「採血」技術の修得過程を促す指導に関する研究 - 教師が気になる学生の部分行動の分析 -、千大看紀要21：63-68、1999

## Significance of Education for Nursing Techniques with Practical Examination in Collecting Blood Specimens

Kadokaru Eiko, RN, DNS.<sup>1)</sup>      Kinjo Shinobu, RN, MNS.<sup>1)</sup>  
Nashiro Kazue, RN, MHS.<sup>1)</sup>      Asato Yoko, RN, MHS.<sup>1)</sup>

The purpose of this study was to define the significance of education for nursing techniques with practical examination in collecting blood specimens. The subjects were eighty sophomore students of a public nursing college. The students took the practical examination in collecting blood specimens from each other. After that the students answered a questionnaire regarding their ideas about such an examination and their feelings about their experience. The questionnaires from 73 students were analyzed. The meanings were found from descriptive data in the questionnaires and defined the significance of education for nursing techniques with practical examination in collecting blood specimens.

The results are as follows,

1. Satisfaction with the points of the nursing techniques and the reasons through their own experience.
2. Understanding that the nursing techniques have to be applied to the person individually, and that they must be able to adapt to unexpected situations.
3. Realization that patients are sensitive to the nurse's behavior and mood, and imagining the good nurses that they want to be.
4. Gaining self-confidence and responsibility as a nurse by overcoming the stresses that come from fears and pressure.

**Key words;**education for nursing technique, taking a blood specimen, actual experience, practical examination

---

1) Okinawa Prefectural College of Nursing